

R.シュトラウス

# アルプス交響曲 作品64

ルドルフ・ケンペ指揮/ドレスデン国立管弦楽団 <ドレスデン国立歌劇場管弦楽団>



## 制作にあたって

オーディオ・チェックレコードというと「音は良いけれど、曲や演奏がつまらない」ということをよく耳にします。

そこでDAMでは、曲も演奏もよく、更に録音・カッティングも良いレコードを作ろうということで、このアルバムを企画しました。リヒャルト・シュトラウスは、ドイツの大作曲家で、オーディオマニアの方なら「ツアラトゥストラはかく語りき」の冒頭を一度はお聴きになったことがあるでしょう。そのR.シュトラウスが、オーケストラのあらゆる楽器とテクニックを駆使して、アルプスの夜明から日没までを雄大なスケールで描写したのがこの「アルプス交響曲」なのです。

1976年5月11日、惜しまれながら世を去った巨匠ルドルフ・ケンペの指揮、更にこの曲をR.シュトラウス自身の指揮で初演した、世界最古の伝統を誇る、ドレスデン国立管弦楽団という最高の演奏陣です。このレコードは東芝EMIより市販(EAC-80099)されていて、33回転ながら、その音の良さでも話題になっています。

そこでDAMでは、東芝EMI技術陣の協力を得て、これを45回転でかつ、ハイレベルカッティングのため、一面あたり10~15分に押さえ、四面(2枚)でカッティングしました。もちろん、ダビングは行わず、新鮮なマザーテープから、ダイレクトにカッティングしたわけですが、とにかくクリアでかつ奥行のある、パイプオルガンを含む大編成のオーケストラが、圧倒的なスケールで眼前に迫ってきます。

これは単なるオーディオ・チェックレコードというだけではなく、「音と音楽」が見事に調和した、音楽マニアにもオーディオマニアにも充分満足していただけるレコードと自負しております。なおオーディオ的な聴きどころは、全曲のいたるところにあります、特に第3面の冒頭および、第4面の前半の嵐の部分が好適でしょう。

DAM推進委員会

## 演奏者について 三位一体の名コンビ

ドレスデン国立管弦楽団 Staatskapelle Dresden は創立後すでに430年に近い古い歴史を持つ東ドイツの名門オーケストラで、以前はホーフカペレ(ザクセン宮廷管弦楽団)と呼ばれ、「アルプス交響曲」もこのオーケストラによって初演されました。そのほかリヒャルト・シュトラウスのオペラは「サロメ」「ばらの騎士」「エレクトラ」など、その大半がこのザクセン宮廷歌劇場(現・ドレスデン国立歌劇場)で初演されたものです。ドレスデン国立管弦楽団は、その歌劇場のオーケストラも兼ねているのです。「ドイツのフィレンツェ」とも呼ばれるエルベ河畔の古都ドレスデンは、ドイツ・バロックの巨匠ショットツやワーグナーともゆかりの深い土地ですが、いうならば「シュトラウスの都」もあるのです。

指揮者のルドルフ・ケンペは、現在はドレスデン市的一部になっている近在に生まれ、若いころリヒャルト・シュトラウスの指揮に親しく接しました。彼は1949年(39歳)にカイルベルトの後任としてドレスデン国立歌劇場の指揮者になりました。晩年ケンペはミュンヘン・フィルハーモニーの音楽監督とロンドンのロイヤル・フィルハーモニーの首席指揮者をも兼務しましたが、彼はとくにリヒャルト・シュトラウスの音楽にかんして、ドレスデン国立管弦楽団の演奏をきわめて高く評価しています。彼は、岡崎昭子さんの訳で伝えられた対談のなかで、およそ次のように語っています、「このオーケストラは彼の音楽を知っており、よく理解しています。その上、ドレスデン国立管弦楽団の格別な音色、透明な音、すばらしく柔軟なリズム感は、シュトラウスの音楽にまったくぴったりなのです」と。

「リヒャルト・シュトラウス」と「ドレスデン国立管弦楽団」と「ルドルフ・ケンペ」とは、まさに三位一体(さんみいったい)の名コンビといふことができるでしょう。EMIがレコード史上最初の『R.シュトラウス管弦楽曲全集』(全3巻)をケンペとドレスデン国立管弦楽団によって作製したのは、ひとつにそうした理由からでした。その世界的にきわめて高い評価を受けている全集盤中の1枚が、この「アルプス交響曲」のレコードなのです。

## 「アルプス交響曲」という名の交響詩

ドイツ後期ロマン主義音楽の最後の巨匠リヒャルト・シュトラウス(1864~1949)は、歌劇「サロメ」(1905年)でセンセーショナルな成功をおさめて以来、おもに舞台作を書きつけましたが、「ばらの騎士」(1910年)の翌年、彼の長年のコンビであったオーストリアの詩人・劇作家のフーゴー・フォン・ホフマンシュタールが「影のない女」の台本の創作に従事していた「空き時間」を利用して、「家庭交響曲」以後12年ぶりで新しい交響詩のスケッチを始めました。その作曲に本格的に取りかかったのは3年後の1914年11月1日で、ちょうど100日をついで翌1915年2月8日に完成され、同年10月28日にシュトラウス自身指揮ドレスデン・ホーフカペレ(現ドレスデン国立管弦楽団)によって初演されました。これが、前作「家庭交響曲」と同じく事実上は1楽章形式の大交響詩である「アルプス交響曲」Eine Alpen sinfonie, op.64なのです。シュトラウスはこの後ふたたび作曲の主舞台をオペラに移し、結局この曲が「ドン・ファン」「死と変容」「ティル・オイレンシュピーゲルの愉快ないたずら」「ツアラトゥストラはかく語りき」「英雄の生涯」などをふくむ彼の一連の交響詩の最後の作品になりました。

シュトラウスは若いころから山を愛し、たびたび登山を試みました。14歳のときにはアルプスで道に迷い、嵐に襲われて、12時間歩きづけた末、ようやく農家で一夜を明かしたこともありました。また彼は1908年から、ミュンヘンの南方バイエルンアルプスの北麓(海拔700m余)ガルミッシュ=バルテンキルヘンに大きな家を建てて、1949年に世を去るまでの40年間あまり、この家に住みました。「アルプス交響曲」もそこで創作されたもので、この曲は、上記の青少年時代の登山の体験の思い出をそのなかに織り込んだアルプス賛歌、そしてガルミッシュの山荘での一日の日記ともいえる作品です。

シュトラウスは、音楽によって描写できない情景や物事はひとつもないと自負していた作曲家ですが、彼はこの交響詩でも、練達で精緻な作曲技法を存分に駆使し、また特殊な打楽器なども加わえた大編成のオーケストラを用いて、アルプス登山で味わうさまざまな印象を、素晴らしい音楽的な写実力と描写力をもって眼で見るよう表現しています。総員109名を必要とする巨大なオーケストラ中には、パイプ・オルガンもふくれます。また「ヘッケルフォーン」というバリトン・オーボエの一種や、「風音器」「雷音器」(風の音や雷の音を出す機械)なども用いられています。これらはシュトラウスの依頼に応じて作られた楽器で、「雷音器」は「アルプス交響曲」にはじめて使用されました。そのほか「家畜の鈴」まで活用されているのです。しかもオーケストラは舞台上だけではなく、その背後にもホルン12、トランペット2、トロンボーン2が配置されます。シュトラウスはさらに、木管楽器の音を長く保持させるために考案された「サムエルのエアロフォーン」Samuels Aerophonの利用も薦めています。

シュトラウスは「ただ音でだけ真実を表現し、言葉ではただ暗示するだけ」(門馬直美訳)と好んで語っていたといふことで、「アルプス交響曲」にも詳しい標題的な説明は書きしるされていません。しかし、連続する22の部分に簡単な標題がかかけられていますし、全曲が特定の情景をあらわす主題や動機で統一されていますから、それらを注意して聞いてゆくと、このアルプス音楽絵巻のプログラムははっきり理解できます。なによりも、シュトラウスの微に入り細に入った描写力と、迫真的な効果に賛嘆せられる名曲なのです。

### ①—夜〔第一面〕



Nacht  
Night  
(1'00"~3'22")

山(アルプス)は、まだ夜の帳(とぼり)につままれて静かに眠っています。冒頭の8小節はその描写で、弱音器をつけた弦楽器と静かな木管の下降する音型がゆるやかにひそりと奏されます。つづいてトロンボーンとバス・チューバが変ロ短調の弦の和音の上に低く現われます――

これは全曲中にしばしばくりかえして出てくる「山」の主題で、これには変ロ短調の音階の12の半音がすべて使われています。

あたりはようやく白んで、未明の空にアルプスの高い山がほのかに見えはじめたのですね。夜明けは、もう間近かです。曲は「山」の主題を中心に、しだいに音量を強めながら発展して、弦の上昇は最後にハープのfffのグリッサンで次のエピソードに入ります。

### ②—日の出



Sonnen aufgang  
Sunrise  
(4'22"~4'45")

深紅の太陽が夜明けの空に姿をあらわしました。輝やかしいトランペットを中心にオーケストラ全部の強奏で、次の「日の出」の主題が奏されます――

これは冒頭の「夜」の主題の変形で、チャイコフスキイの「悲愴交響曲」の第1楽章の樂想によく似ています。この主題(イ長調)は音が下降していく形をとっていますが、それは「山頂にあたった太陽がだんだん谷底まで光でうみてゆくため」(E.S.ケリー～秋山竜英)だといわれます。金管樂器がこの「日の出」の主題を反復しますと、一瞬おくれて木管と弦に次の対主題が踊るように出てきます。眠りからさめた山のいきいきとした表情をあらわす樂想です――

「山」の主題が形をかえて姿を見せ、曲は登山者(つまりリヒャルト・シュトラウスその人)の闘志をかき立てるように盛りあがって、短い休止が、全曲の「序奏」にこれまでの部分を結びます。

### ③—登り道



Der Anstieg  
The ascent  
(7'45"~7'03")

よい天気にめぐまれて、いよいよ登山の開始です。すくニテロとコントラバスに「登り道」の主題が活気をもって示されます――

山道のデコボコを示すこのジグザグした旋律線の主題は、同時に登山者であるシュトラウスをあらわす重要な主題で、ここでは展開ふうに扱われて行きますが、しばらくすると登り道のもう一つの主題が金管で奏されます。付点リズムのこの主題は、「岩場」あるいは「岩壁」をあらわすものです――

アルプスの山を登って行くと、やがてこうした岩場にさしかかるのですね。登山者がそれを乗り越えると、遠くから狩の角笛がきこえています。これはステージに陣どる大オーケストラとは別の、舞台裏のブラス・バンドによって奏されます。

